



話題の本棚

弓削尚子著『はじめての西洋ジェンダー史』

シーモア・チャットマン著、玉井暉訳『ストーリーとディスコース 小説と映画における物語構造』

特集／推し出版社

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/

歴史学がジェンダーを知る／歴史学のジェンダーを知る

はじめての

西洋ジェンダー史

家族史からグローバル・

ヒストリーまで

弓削尚子著 山川出版社



普段何気なく口にされる言葉こそ、積み重なった歴史がある。女、男、母、父といった、いわゆるジェンダーに関する語の場合もまさにそうだろう。近年、国や地域を問わぬ活動家達に鼓舞され、性を巡る理解が刷新されつつあるが、そもそも人は、歴史的に常に新しい性の在り方を産出し続けてきたのである。

強制される、あるいは逃れ去る性——その史料と研究——

一様でない性の歴史性を知るには、この一冊が心強い味方になってくれるだろう。早稲田大学での講義に基づく本書の内容は、西洋のジェンダー史を七つの捉え方によって分かりやすく解説するものである。近代以前からの様々な家族像を実証的に考察する「家族史」に始まり、身体史や男性史など、多角的な章立てが印象深い。

あらためて言えば、同書で論じられるジェンダーとは、社会的、文化的に構築された「その性らしさ」のことを指す。女性は子供を慈しむとか、男性は戦いに長けるといった男女のジェンダーは、当然普遍的なものではない。ジェンダー史家はその現実を、遭された史料を手がかりに明示する。例えば本書では、性別を隠し男として世を生きた女性達についての公文書や、ワンセックス・モデルに基づく科学的テキストが参照されている。そうした史料を発見したと

れまでの研究者によって、一様な性の在り方を定める政治や社会に抗し、多様なジェンダーの復権が急されてきた。著者の弓削は先行研究を挙げながら、このような歴史学とジェンダーとの来歴に言及しており、その手際の良さには脱帽するしかない。

「はじめて」は繰り返し続ける

失礼を承知で喩えるなら、本書の読み心地はノベルゲームのようである。もし仮に歴史が、世紀を経て紡がれる一本の時間軸だとすると、その一回の歴史を異なる視点から何度も読み直す構成が、この本には組み込まれている。そのため、フランス革命や第二次世界大戦といった事件は繰り返し言及される。しかしそれらは同様に取り上げられるのではない。一つの戦場でも、そこで戦う／戦わない男女がいる。あるいは西洋と非西洋といった背景の差異もあるだろう。多面的に歴史を捉えることで、一つの世界線にディティールと膨らみが生じるのである。

ただしゲームと異なる点も多い。史実「事実」の集積であり、自由な創作は許されない。それにルート分岐が用意されているわけでもない。だからこそ、史料を重視し、一つの世界に複数の視点を供する必要がある。本書にはこんな言葉が引用されていた。「史料は大鼓のようなもの。誰かが叩かなければ音はでない」。過去の史料に、今の人間が共鳴し、未来へと歴史は始動するのである。

歴史の教科書で有名な山川出版社から公刊されている点も本書の評価すべき点だろう。文中には世界史選択の受験生に通じる真面目な小話も含まれる。学部一回生には特にお勧めしたい。

(二〇四頁 税込二五三〇円 11月刊)

物語の構造とは？

ストーリーと

ディスコース

小説と映画における物語構造

シーモア・チャットマン著

玉井暉訳 水声社



物語理論——物語論、文学理論、ナラトロジーとも言われる——という分野を知っているだろうか？ 文学に限らず様々な作品があるが、その構造を捉えようとする分野である。物語に関して大きな要素が二つある。たとえば小説を読む時、我々は物語の内容、つまり「ストーリー」展開や登場人物の心情・行動に興味を覚えることがよくある。そういった「何が描かれているか」という点に関する要素を、本書の著者チャットマンは「ストーリー」と呼ぶ。他方、たとえば第三者の視点から物語が語られている作品もあれば、登場人物「私」の視点から語られるものもある。こうした「どのような語り方がなされているか」という点に関する要素を彼は「ディスコース」と呼ぶ。この二大要素は物語論の分野では基本的といえるものだが、本書では例を挙げながらそれらの分類をより詳細に分析している。その一端をここに紹介したい。

「ストーリー」

ストーリーについてチャットマンは「出来事」と「存在物」に着目して分析を進める。一言でいえば物語の中に「誰（何）が登場して」「どんなことが起こるのか」ということである。ストーリーとは出来事の連続、つまりそこに時間的な流れがある。語る順序を前

後させたり時間的な緩急をつけるディスコースでこの時間の流れは印象的に読者に提示される。また、そのストーリーから読み取れる因果関係や必然性がある。こうした必然性を強めるあるいは転倒する機能として先ほどのディスコースが有効になるといえるだろう。一方、存在物、すなわち登場人物や物・景色についてのディスコースはストーリー空間の描写に等しい。ただ、すべてを描写し尽くすことは出来ないが故に取捨選択がなされる。そこで何が注目され、何がぼかされるのか、ここでは映像作品からの引用を交えて説明がなされており、説得力がある。

「ディスコース」

ディスコースを論じる時、そこに現れてくるのは「語り手」の存在だ。語り手はストーリーを読者に伝える仲立ちの役割を持つ。ここで問題になるのが語り手のストーリーへの介入の度合いである。語り手はストーリーをただ見せているのか、それとも解釈を施した上で語っているのか？ チャットマンはまず解釈の施されない「語りのない物語」とは何かについて、独白や自由直接話法、意識の流れなどのディスコースを、様々な作品を例に取りつつ分析を試みる。さらに、解釈を含んだ語りが行われた場合に、その妥当性や信頼性に関して、文学理論上でよく言われる「信頼できない語り手」や注釈の挿入などの例を挙げて説明を行っている。

本書ではジュネットなど物語理論の基礎となった研究への言及も多くこの分野の要点が手くまとめられている。また文学だけでなく映像についても研究の視野を広げる一冊といえるだろう。(ね)

(四〇〇頁 税込五五〇〇円 12月刊)

〈特集〉

推し出版社

出版社で本を選んだことがありませんか？ この出版社から出た本だったら間違いないと、そう確信できると出版社はありますか？ 推しのアイドルがいるように、推しの出版社があってもいい。そして、推しのアイドルの魅力を人に語りたくなるのと同じように、どうしてもその魅力の人に語りたくなる出版社があってもいい。そんなことを漠然と思っていたら、いつの間にか「推し出版社」という特集を組んでいました。本の背表紙の一番下を見ると、そこには小さく控えめな文字で出版社名が書かれています。皆さんの目が、そこに少しでも行くようになってほしいです。



(はや)

ぼくには、本しかなかった——夏葉社

今、私の部屋にはおそろしく二千冊ほどの本が置いてある。半分は新刊で、もう半分は古本といったところだろうか。一応まだなんとか本棚には収まっている。しかしもう流石に場所がない。もうこれ以上買うことはできない（買うけれども）。買ったなら部屋が本で埋め尽くされてしまう——。こんなはずじゃなかったのに、なぜこうなってしまったのか。それはこの一年で狂ったように古本を買ってしまったのだ。ではなぜ狂ったように古本を買ってしまったのか。それは、山本善行・清水裕也『漱石全集を買った日』と出会ったからだ。

古本の沼へと引きずり込む一冊

本書の副題は「古書店主とお客さんによる古本入門」。古本を愛してやまない



二人が、古本についてゆるく楽しくおしゃべりする、というのがその内容だ。私は本書によって、古本の沼へと引きずり込まれた。そしていまや座右の書となった本書を繰り返し読んで、古本の知識を蓄え、汲めども尽きぬその奥深さに言い知れぬよこびを感じている。新刊もいいが古本もまたいいのだ。

私は本書を通じて「古本」という生涯の趣味を見つけたことができた。そしてもうひとつ、私は本書を通じて「夏葉社」という出版社を知ることができた。そう、本書を世に送り出した出版社だ。夏葉社という出版社を知った私は、以来、夏葉社を推している。夏葉社から新しい本が出たら必ず買うようにするほど、私は夏葉社に魅了されている。そのように出版社買いをするのは夏葉社だけだ。

装丁へのこだわりが見える一冊

夏葉社は、文芸書の刊行を中心とした小さな出版社で、「ひとり出版社」の先駆けとしても知られている。夏葉社を立ち上げたのは島田潤一郎さん。島田さんは、編集も、営業も、事務も、発送作業も、経理も、全部たったひとりでやっている。これは相当大変な作業なのだろうが、こうして島田さんがすべての工程に関わり、目をしっかりと通しているからこそ、夏葉社から出る本は毎回こだわり抜かれたものになるのだろう。

そしてそのこだわりは、とくに装丁に表れているように感じられる。夏葉社の本はどれも本当に美しい。たとえば『漱石全集を買った日』のなかで、山本さんはこう語る——

「上林晧の『星を撒いた街』なんかは、上林晧は全然知らなかったけど、この本の美しさや魅力に惹かれて読んでみようと思った」という人が多かった。今、私の手元にも、この本がある。ちょっとあり得ないくらい美しい。夏葉社から出た本のなかでも群を抜いて美しいのではないかと思う。装丁は地味で落ち着いているが、にもかかわらず、どんな派手で目立つ本よりも大きな存在感を放っている。やはり本は物としてそこに存在しているのだためだと思わせる、そんな一冊だ。

ちなみに上林晧

について述べておくと、彼は昭和期に活躍した私小説作家で、「善悪盗人」「聖ヨハネ病院にて」「白い屋形船」などの代表作がある。上林は不思議な作家で、たとえば「空は青かった」という何というところはない一文にしても、それが上林の作品のなかに置かれると、途端に涙を誘う美しい一文へと様変わりする。彼の素朴な情景描写がなぜあそこまで私の心に沁み入るのか、それはいまだにわからないが、とにかく彼が魅力的な作家であることに間違いない。『星を撒いた街』は、上林の短編から選りすぐりのものを八編収録している。余談だが、一つめの短編「花の精」は、二〇一九



年度のセンター試験で出題されたため、もしかすると知っている人もいるかもしれない。

*

『あしたから出版社』（晶文社）と『古くてあたらしい仕事』（新潮社）という本がある。どちらも島田さんが書いた本だ。島田さんがどのような出来事を経て夏葉社を立ち上げるに至ったのか、島田さんは本に対してどのような想いを抱いているのか、ということが語

語りにも君主無し——共和国

本好きは、ただ読むだけでは飽き足らず、好きな本の出版社のファンになってみたり、装丁を隈なく眺めてみたり、編集者の歴史を学んでみたりするらしい。かく言う私にも推しがいる。出版社の名前は「共和国」。ひとまずわたしが出会ってよかったと心から思う三冊を取り上げることによって、「共和国」が共和国たるゆえんが読者に少しでも伝わればと願う。

ガリと出会う

「世界で書物をロマン化します」——そんな共和国のもつレーベル（世界浪漫派）から二冊ご紹介しよう。ロマン・



ガリ著、岩津航訳『夜明けの約束』は、私に

られる。前者の本のなかで島田さんはこんなことを言っている——「自分の人生を振り返ってみると、ほかの、ほかの人たちより情熱を注ぎ込み、飽きずに続けてきたのは、本を買い、読むことだけだった。あとは全部、ダメだった」。私にはこの気持ちが痛いほどわかる。情けなさど誇りが入り混じった、この同じ想いを共有しているからこそ、私は夏葉社を推すのかもしれない。（はや）

とって思いがけぬ出会いだった。本書は、主に母の愛を一身にうけて育ったガリと彼の母親とのエピソードである。時に暴力的であり時に純真な献身そのものである二人の交わりは、哀愁に満ちた愛の物語……ではない。彼の文体によって美しく、またユーモラスに彼の心境が描かれる。

「私の書く本が尊厳や正義への呼びかけに満ちているとしたら、また、人間であることの誇りをこれほど何度も高々と讃えているとしたら、それはたぶん二十二歳になるまで、独身で動きすぎの年若い女性の仕事のおかげで生きてきたからだ。私は彼女のことをとても憎んでいる。」

ガリは、空軍や外交官としての華麗な経歴

をもつが、自伝において自身の失敗談をむしろ強調するかにように綴る。本書末尾の訳者解説の隅々まで読んでしまう本。

書を持って、町へ出よう

自分だけのスペースを手に入れた今、馴染みの人と馴染みの場での語らい、読書、それだけで満たされてしまった。昔、旅先で感じた空気や色彩豊かな景色に圧倒された記憶がかすかにあるだけ。もう、家の方が楽か……なんて。そんな日常に新たな風を吹かせてくれるのは、福岡恵子著『ポルトガル、西の果てまで』。スペインに魅了されていた著者が、不思議とポルトガルに惹かれていく。ただ、著者は興味をもったとにかく行動に動く。ポルトガルでの小旅行後にはまずポルトガル語を学び、ポルトガルの小さな村ではみたことのない魚を市場で買って料理をこなし、また別の村では祭りがあれば最終日まで村男たちの歌を聴く。旅路を一步一步ともに歩いているような、そんな確かさをこの文章は私たちに与えてくれる。旅をしたい、純粋にそう思わせてくれる。旅に出るときに本書は必携である。



境界を越えた物語

〈境界の文字〉というレーベルの中からの

一冊、アーノルド・ゼイフル著、菅野賢治訳『カフェ・シエハラザード』。このカフェには、ホロコーストを生き延びた生存者たちが集う。著者は、彼らの生きてきた軌跡に今日もまた耳を傾ける。彼らは語る——時には勇敢に、寂しげに、面倒くさそうに。彼らは同じ生存者でありながら、全く別の経験をし、オーストラリアのあるカフェに偶然集う。彼らは何者とも認められることなく生き延び、今もまだ記憶の断片を繋ぎ合わせる作業を繰り返している。ある日、突然自分の命を生きるに値するかジャッジされる。しらみだらけの生活から脱し、今では一日に数回シャワーをする。いつか会えると思っていた家族とはあの日が最後だった——。彼らの一人ひとりが物語を待っていた。言葉が集



名物社長の推す写真家たち——赤々舎

「推し出版社」に「推し編集者」あり。

赤々舎社長・姫野希美。大分県に生まれ、早稲田大学で和歌の研究に没頭して博士号まで取得した直後に上海へ渡り、現地で不動産仲介会社を立ち上げて二年ほど働いた後、帰国。二〇〇六年に赤々舎を立ち上げ、翌年には出

まり、物語になり、一冊の書物となる。生存者の一人は、こう語られた気がした、と本書で述べる。「いまだ生にしがみついて、この狂った世界にも終わりががあると信じている君は、歩き続けなければならぬ、と。」

共和国の本はまだまだ紹介しきれないが、形、装丁、余白はみなバラバラで、中身も濃縮された曲者たちである。また、共和国の書物には全てではないが「共和国急使」なるものがついている。私は葉がわりとして使っているが、この急使がなかなかよい。時には激しく共感し、時にはほっこり微笑する。推し出版社なるものと出会ってしまうところ。裏側の話はありがたく読んでしまうものだ。

この出版社は、多様な語りがある。人々が共存することができる「国」である。言葉を紡ぐのに、そして生み出された一冊の本に、君主は必要ない。(トントウ)

版した写真集が木村伊兵衛賞を受賞。現在に至るまで数々の話題作を送り出し続けている。しかし写真撮るのは「めっちゃ下手」。ちなみに、酒豪である。そんな姫野は写真家や作家たちとのように出会い、本を作り上げてきたのだろうか。

『浅田家』とバーボン

二〇二〇年、二宮和也

主演の映画『浅田家』は数々の賞を受賞し、ヒット作となった。その原案となった作品が、浅田政志『浅田家』だ。



本作は浅田が自らと自らの家族にカメラを向けた記念写真によって構成されている。赤をキーカラーとするオモテ面から観ていくと、消防士や水族館員、極道などに扮した家族の写真が続く。クソッと笑える。本の真ん中で一度本は終わる。次は青をキーカラーとするウラ面から観てみよう。こちらは日常的な家族写真が多い。伊勢の春夏秋冬と、浅田家の朝昼夕夜。少しコワモテの親父。そんな親父によく似た兄弟。品のある雰囲気ながら夕食では家族でただ一人、大ジョッキを傾げる母。彼らは家族だ。再びオモテ面から本を開く。浅田家という演者は作品内で固定されており、彼らは普段の距離感で様々な家族を演じている。家族に血縁は不可欠ではない。言葉にしようとすると溢れてしまう固有の雰囲気や纏う関係性——それを共有した存在が家族なのだ。

出版されたのは二〇〇八年。当時の浅田は駆け出しだった。いくつもの出版社に作品を持ち込んだが、出版には至らない。創業まもない赤々舎のことは友人から勧められるまで知らなかったという。浅田が昼間に作品を持ち込んだ際、姫野は二日酔いだった。浅田の写真を見て姫野は「私、いい写真見ると飲みたくなるの」と呟き、ストリートでバーボンを啜り始めた。

このバーボンの「昼」からわずかに半年で『浅田家』は出版された。浅田はこの半年間を自身の人生が劇的に変わった時間だと振り返る。創業以来、赤々舎は多くの若手写真家の作品を送り出してきた。出版段階では無名の写真家も少なくない。作家と作品、そして「これをつくらなければ生きていけない」というほどの自身の直観を信じ、姫野は数々の写真集を手がけてきたのだろう。

『いのちのうちがわ』に浸る

石川竜一も赤々舎から写真集を初めて商業出版した写真家である。石川は自身が生まれ育った沖縄の人間たちを巨大な中判カメラを通して写真にしてきた。真正面から捉えられた被写体の表情に明確な喜怒哀楽はなく、自然体である。生命から発散される力を、できる限りありのまま写真で伝えたい。石川の衝動は『いのちのうちがわ』へと向かった。

石川の最新作である本作は三四センチ四方という大判プリントである。本は綴じられておらず、タイヤのゴムのようなものでまと

られている。読者はそのゴムを外し、一枚一枚写真を手にとらざるを得ない。税込一万四千三百円、限定七〇〇部のみ生産された本作のプリントは精緻かつ階調豊かな。壮麗な写真によって、北海道や山梨の美しい自然と、雉や鶯、鹿や猪などの動物が一つ一つ提示される。紙に印刷されているにもかかわらず、本当にそこにあるかのような錯覚さえ感じる。

写真に手を触れ、無で、持ち上げてみる。自分のお腹に写真を合わせてみると、人間の腹部は概ね三四センチほどであるとふと気づく。写真に写った実物大に近い内臓は、確かに身体の内側に収められていたのだ。

石川は姫野を「仕事もプライベートも、全部一緒に考える」人と表現する。毎日電話で話していた時期もあるそう。石川は被写体に対し、姫野は作家と作品に対し、身も心もどっぷり浸かりたいのだろう。本作は赤々舎の手がけた現段階の石川作品の集大成である。なお、本稿の姫野と作家たちのエピソードは『本をつくる 赤々舎の12年』（産業編集センター）を参考にしている。

読者を古本マニアにしてしまうほど、本には魔力がある。そんな本を作る出版社のことを知りたい、葉や編集者まで調べ上げるほどに。『推し出版社』のおかげで、一冊の本をもっともっと愛せるようになった。(石透)

新刊コーナー

王子失踪す

山上たつひこ著

新潮社



— 王子が失踪した。

主人公笹山の娘、

瑠璃。そして瑠璃の

大切なお人形、ミカ

ちゃん。失踪したのはミカちゃんのボーイフ

レンドだった。当初、笹山は瑠璃がただ失く

したのだと思っていた。ところが瑠璃の「彼

の家族がいらないから出ていった」というセリ

フを聞いて、新しい人形の催促だと思った。

買い与えれば解決すると思っていた……。

しかし新しい人形は新たな波紋を引き起

す、ミカちゃんと合わないのだ。「あの人は

性格がよくないの」。ミカちゃんと新しい人

形の仲違いを瑠璃はなんとか仲裁しようとする。

その時、事件が起きる。ドールハウスが

燃え、中から燃え尽きた人形が発見されるの

だ。そして繰り返し返される失踪、残された遺書、

犯人は誰だ……？ いや、人形劇なはずだ、

あくまでも瑠璃の頭の中の世界なはず。どこ

ろが瑠璃までもが失踪した時……。

ギャク漫画家で一世を風靡した山上たつひこの新作。笑いの構造を分析し続けた著者は晩年、小説の舞台に立った。そして笑いの素材を探求し、そこに人間の悪意や不安を見出した。「笑いって陰気なんですよ。だから人間って笑いながら、恐怖や怒りを収めるためにお題目を唱える生き物なんだと……今回のすべての短編にはそれが流れています」

恐怖や不安こそが笑いの要素なら、笑いを求めてやまない社会とはなんだろう——そんなことを考えながら本書を読んで笑ってしまった、あまりにも怖すぎたから。(きもの) (二七二頁 税込二二〇〇円 12月刊)

きみだからさびしい

大前栗生著

文藝春秋



本書は、好きゆえに相手を尊重することの悩ましさについて描いた恋愛小説である。恋愛の多様なあり方が認められだした現代において、どう他者と関係を築いていくことが望まれるのだろう。

主人公の町枝圭吾は、あやめさんという好

きな人がいる。その彼女とただ一緒にいるだけで幸せだったけれど、ある日告白してみる。彼女がポリアモリーだった。彼女を受け入れたけれど、嫉妬に駆られて辛い。対するあやめさんは、蓮本さんも圭吾くんも好き。圭吾くんは、蓮本さんも圭吾くんも好き。自分、自分に正直でありたい。そんな二人の恋路と共に、二人を取り巻く登場人物たちもまた恋をし、悩み、前を向いていく。ひとりひとりの心の動きが視点を交えて描かれ、私たちは登場人物の心の痛みと弱みを知る。

「ただ誰かのことを好きだけなのに、好きと苦しいが近くにあってほしい。どうしてなんだろう。」——誰の多様性も尊重できる、したいと思える、でもきみだからできないというその素直な文章たちが読者の心に食い込む。

相手が自身の一部になっていくほど、相手を自分の心の穴に当てはめようとする。記述で

きない苦しみと喜びの間にあるさびしさと向き合うこと、それを乗り越えようとするこ

——それがあなたの相手に対するとびきりの愛なのだ、本書は伝えてくれる。

著者大前栗生にとって、本書が初の長編作品である。短編で描かれてきた登場人物の繊細な心の動きが、時間的長さを伴い、より一層味わい深くなっている。

(二〇〇頁 税込二六五〇円 2月刊)

繁花(上・下)

金宇澄著
浦元里花訳
早川書房



「愛する苦しみを
てどういふことやら
なあ」何気ない会話。

何気ない日常。私た

ちの生活と地続きの世界がそこにある。

上海で育った三人の少年、アアバオ・フウ
ション・シャオオオ。彼らは特に自立した
少年、というわけではなかった。非凡な才能
があったわけでも、異常な何かがあったわけ
でもない。言うなれば、「普通の」少年だっ
た。そんな彼らも大人になり、上海を離れる
ことに。この物語は、フウションが久々に
静安寺市場を訪れるシーンから始まる。

本書には悪役も、ヒーローも、トリックス
ターも登場しない。言ってしまうえば「普通
の」人々だらけだ。そして描かれるのも瑣末
な事柄ばかり。誰が誰と寝ただとか、誰が何
を買ったとか、誰がどこにいったとか。

— そんな些細な日常を描くことで、逆説的
に、時代の激動に飲まれる上海をドラマチッ
クに表現することに成功している。本書はミ
ステリーでもなければ、SFでもない。「な

んでもなき」の中に、登場人物の生き様を覗
いていただければと思う。

余談だが、本書では登場人物がなぜか関西
弁で話す。上海の方言を表そうとしているの
か。その意欲的な翻訳が面白い。

「何言うてんねん、小毛。生きてくため
には何かやらなアカンなあ」

関西弁が、なぜか温かい。原文をどれたけ
再現しているかはさておき、日本語で読む読
者を掴むのは間違いない。(出席点)

(五二八頁 税込二九七〇円 1月刊)

社会学

—「非サイエンス」的な

知の居場所

筒井淳也著 岩波書店

学説史でもなければ
ば主要研究領域の紹
介でもない。入門書
ないし概説書として



読み始めたら面食らうかも知れない。本書を
通読すれば、社会学の方法論を抽象的に(こ
れは決して「曖昧に」と同義ではない)理解
できることは間違いない。しかし、著者の関

心はむしろ、それを「反照戦略」と定位し、
経済学や心理学など隣接分野のそれ(「距離化
戦略」と比較すること)で、両者の特長を示す
ことにある。そのような意味で、本書は社会
学に限らない、広く社会科学の基礎論・原論
である。換言すれば、本書は社会学徒のみな
らず、サイエンス／非サイエンス的な探求に
関心がある読者にあまなく資するものである。

立論に際して、著者は「対象との距離」に
着目する。法則定立的な「サイエンス」を志
向する場合、対象からは距離をとる＝モデル
化することになる。そのような「距離化戦略」
に対して、単純化を避け、多様な要因が交絡
する事象に接近し、それらを記述する＝「対
象の側から問いを受け取る」のが「反照戦略」
である。両者の志向は異なる一方で、必ずし
も排他的ではない。「反照戦略」には固有の
意義がある。本書での論証は明晰で、また、
「量的なもの」の質的決定の問題など、家族
社会学を専門とする著者だからこそその切り口
と洞察も非常に面白く、啓かれるものは多い。
では、たとえば、「距離化戦略／反照戦略」
は、「量的／質的」や「マクロ／ミクロ」な
ど、他の類型とはどのような関係にあるのか。
そう疑問に思っただけなら、本書を読
む準備はもう整っている。(投稿・侯爵)

(二六四頁 税込一九八〇円 11月刊)

言語が違えば、 世界も違つて見えるわけ

ガイ・ドイッチャー著
 椋田直子訳 早川書房



言語の問題は皆にとつて身近で、いつだって議論の格好の種になる。言語が異なることももの見え方は変わってくるのか？あるいは国民性が言葉を作るのか？ 認識が先か言葉が先か、そもそも、れっきとした違い、あるいは同一性はあるのだろうか？

こうした疑問に対する明瞭な答えを、一刻も早く知ろうとしていた人はがっかりするかもしれない。本書は言語世界の優しい解説書ではない。これは言語学という霧深い海を突き進んだ、学者たちの戦いの記録である。

前編で語られるこれまでの言語学の系譜を見れば、著者が本書で挑戦していること——思考の基本的諸相が文化的慣習に影響されていることを、言語を通じて示すこと——がどれほど困難なものであるか、容易に想像がつく。例えば一九世紀に、古代の書物には「青」を表す言葉が存在しなかったことが発見されるが、これが色覚の違いによるものではなく文化の発達段階によるものだと証明されるま

では多く時間を要した。哲学、人類学、生物学や脳科学、様々な分野での発展がある度に、言語学の常識はころりと覆される。時代に翻弄されながらも挑み続ける学者達の様子がドラマチックに描かれている。

後編でついに「言語が違えば、世界も違つて見えるわけ」が紐解かれるわけだが、その内容は実際に読んで確かめてほしい。そして答えを得られるどころかより多くの謎が生まれてしまったことに頭を悩ませてほしい。新たな闇が見えるのも、先人たちの「努力の踏み台」のおかげなのだから。(茫漠)

(四五六頁 税込二二九八円 4月刊)

当事者は嘘をつく

小松原織香著
 筑摩書房



上野千鶴子・中西正司『当事者主権』の出版から約二〇年の当事者という言葉は

様々な論文で見られるようになり、ある程度受け入れられたように思える。しかし当事者であると公表した上で、研究者として生きていくことには強烈で多層的な困難がある。本

書は性被害の当事者としての／哲学研究者としての著者の闘いを丸ごと描く。

「一九歳のときにレイプされた」。この時、著者は「当事者」となった。被害体験を自ら語りつつ、著者は「当事者は嘘をついているのでは」という問いを否定できない。研究者としての著者は明晰にその問いに答えられるのだ。しかし当事者としての著者は、都合の悪い記憶は削除していき捏造していきたりすると不安がる。著者の『私』は、当事者としての「私」も、研究者としての「私」も含む。

性暴力と向き合う「大学生」、性被害の記憶に苦しめられる「当事者」として／研究者を目指す「大学院生」、支援者や研究者と闘う「当事者」として／水俣病の「非当事者」である「研究者」として——提示される著者の「私」は常に別の「私」と相反し、定型のものとも言える当事者としての自らの語りを提示したと思えば、それを研究者として否定したりもする。相容れない「私」たちと向き合い続けた果てに、ジャック・デリダの「救し」を軸とする著者の博士論文は完成する。

当事者性は劇薬である。そのインパクトと危険性の間でもがき苦しみながら、研究者は書き続けるしかない。著者はそこで闘い続ける人々へ鮮烈なエールを送る。(石透)

(二〇四頁 税込一九八〇円 1月刊)

中世イタリアの 都市と商人

清水廣一郎著
講談社学術文庫



ある南イタリアの青年は、名家の娘と結婚するために金持ちにならねばならなかった。そこで、自分よりも弱い人間を次々と襲い、大金を稼いだ。しかし、その後サラセン人に仲間も財産も奪われ云々……。

海が舞台の冒険譚か。一四世紀に書かれたこの物語を読むとき、そこに「歴史」をみる人はほほえないだろう。だがこの話のように、中世イタリアでの商業活動と海賊行為の境界は曖昧だった。中世イタリア社会史研究の草分けである著者が、中世地中海世界を理解する上で欠かせないものの、なかなか触れられないテーマを掘り下げたのが本書である。論考をまとめたものであるため、西洋史の基礎知識がある人におすすぬしたい。

前半三章では、海上交易の様相を明らかにするべく、商品についてはきることながら、輸送手段である船の形体変化にも綿密な分析を加える。続く三章では、「市民」とはいかなる人々なのかというスケールの大きな疑問

から出発し、都市と農村の不可分で相互依存的な関係、さらに史料として使われる証文の書き手、公証人の実態に迫る。

ここで注目すべきは、検証に向き合う際、「かけがえのない細部を慈しんでいるような」著者の態度である。壮大なテーマにアプローチするには、交易手段そのものや史料それ自体の制作過程をも疎かにしてはならない。「細部をいかに大きなコンテキストに繋げ意味づけられるか。勉強、研究、その他何においても、物事に向き合う際に做りたい態度である。」

(一七六頁 税込九二四円 10月刊)

ドガ ダンス デッサン

ポール・ヴァレリー 著

塚本昌則訳

岩波文庫



動くもの、あるいは動きそのものを描くには、どうしたらよいか。美術にせよ

文学にせよ、おおよそ藝術にまつわる永遠の課題である。制作とは記録であり、記録とは制止であるから、躍動とは相容れないのだ。しかるにデッサンは、意味に満ちた構図で

細部まで緻密に描きこまれた絵画よりも、とくに足りない情景を軽やかな筆致で素描してこそ現実の一時を抽出しようという、逆説的な写実性を持っている。デッサンは下絵ではない。鉛筆の粗い線は、動きを捉えようとする意志の軌跡なのだ。

本書はヴァレリーが敬愛するドガのデッサンを手がかりに綴った随想の集成である。この訳書でもドガによるデッサンのかたわらにヴァレリーの文章が置かれている。フランスで長らく稀覯本となっていたドガのデッサン群を手軽に通覧でき、さらにヴァレリーの文章と容易に対照できる、贅沢な文庫版だ。

といて、理路整然とした美術批評を期待して本書をめくると、肩すかしを喰らうだろう。興味深いのはむしろ、ふたりの共通の友人たちも含めた断片的な証言の数々によって描き出されるドガ像、いわばドガについての素描だ。他ならぬ本書の文体こそデッサン的であるがゆえに、もどかしくも心地よい全体性を感じられる。

そうしてゆるやかに書き連ねられたドガとの交友のうちに、ふと箴言めいた藝術論が現われ、すぐさまどこかへ行ってしまうのだ、まるで水中を夢幻自在の輪郭だけが漂うクラゲのように。

(三二八頁 税込一四八五円 11月刊)

極限の思想 ハイデガー

世界内存在を生きる

高井ゆと里著
講談社選書メチエ



『存在と時間』は難解な本として知られる。そしてその難解さゆえに、入門書も数多く出回っている。本書もそのうちのひとつだ。では、入門書が氾濫しているそうした状態にあって、あえて本書を読む意味はあるのだろうか。評者はこの問いに対して、端的にこう答えたい——「ある」と。

それはなぜか。それは本書が、『存在と時間』の新しい読み方を提示しているからである。その読み方とはつまり、『存在と時間』を一貫して「私たちがそれぞれ「私」の生を生きている」とどのような「私」という問いに導かれた著作として解釈する」というものである。「存在」でも「時間」でもなく、私たちの「生」についての分析として、この哲学書を読み解くこと。言い換えれば、存在論の書としての『存在と時間』という見方を掘り崩すこと。ここに本書の狙いがある。これははかなり斬新な狙いであるように思われる。だが、斬新であるがゆえに、本書は面白い。

本書の白眉は「実存の問い」と「実存ギャップ」をめぐる議論にある。世間で意味あるものとされている生き方は、果たして私にとっても意味あるものなのか。「これが自分の人生であった、と確かに言えるような人生とは何か」。世間の人びとと私のあいだに横たわる実存ギャップの存在に気づき、私がこうした実存の問いに染め抜かれるとき、本来的な在りかたへと至る道は拓かれる——。著者はこうして、ハイデガー哲学を私たち一人ひとりの生と結びつけながら解釈していく。この解釈は評者にはとても魅力的に映る。(ばや)

(二五〇頁 税込三三〇円 2月刊)

永遠の平和のために

イマヌエル・カント著
丘沢静也訳
講談社学術文庫



この書評執筆時点で、未だ混迷を極めるウクライナ情勢。

一度は哲学を志した

者として自分に今できることは、この本を手に考えを巡らせること、ただそれだけだった。

先般新訳が刊行されたカントの古典的名著、『永遠の平和のために』を取り上げたい。

今から遡ること二二〇年余り、当時七二歳のこの大哲学者は、「パーゼル平和条約」に対する不満から、政治家へ向けた渾身のメッセージを小冊子に綴った。本書はこの「永遠の平和」実現のための、計九つの具体的な提案とその補足からなる。彼からのメッセージを読み解くとき、そこに隔世の感はない。いやむしろ（皮肉なことに、と言っべきか）それは、今こそ読み直されるべき警世の言葉に溢れている（たとえば「どのような国も、他国の体制や統治に暴力で干渉するべきではない」という言葉ひとつとってもどうだろうか）。あまりに自明と思われた世界の秩序も、今や当の「暴力」が大きく破壊してしまった。しかし、そこはかとなく漂う無力感に、語ることをやめてはならない。私たちはいかにして、この「敵対行為」を退けられるか。彼の提出した課題は、二二世紀の今をもつてなおこの世界に突きつけられたままである。

あるいはカントが存命だったなら、東ヨーロッパで現在進行中の「暴力」に、一体何を思っただろう。彼が本書にデザインした「永遠の平和」実現は道半ば、為政者たちの蛮行に、またしても遠ざけられた。私には歴史を繰り返す人類の、進歩のなさを唾う彼の姿が目に浮かぶようでない。(投稿・東風)

(二二八頁 税込七四八円 1月刊)

「びえん」という病

佐々木チワワ著
扶桑社新書

表題にある通り、本書には「己を傷つけ苦しむ」ことで救いを求める「一見病的な若者の「びえん」な日常が活写されている。だが、その様態は決して不良なだけではないようだ。

新宿歌舞伎町で六年もの歳月を過ごした著者。彼女は当地の若者達がまどう文化を、緻密な記述によって読者に示す。量産系や地雷系といったファッションの相違点や、年齢制限に関わるホストクラブとバーの使い分けなど、各章の内容は、実地での傾聴と観察なしでは分かり得ないものばかりである。

分析と並行して、少年少女の生き死に、性や金を巡るエピソードも語られるが、ここでそれらに好奇の目を向けさせる気はない。歌舞伎町の若人は、既に外見からSNSに至るまで自他の視線に晒され切っており、著者である佐々木が言うところの「推されるアイデンティティ」を極端に渴望している。読者はここに示された一種の青春群像をまず受けとめ、同じ社会の一員として関心を持たねばなるまい。都会に吹く夜風の如く、優しく醒めた筆致から、そんな思念を感じた。

(一九二頁 税込九〇二円 12月刊)

古代中国の24時間

秦漢時代の衣食住から性愛まで
柿沼陽平著 中公新書

小説でも漫画でもいいのだが、舞台となる国や時代が今の日本と異なる時、そこに生きる人々の暮らしをどう想像したらいいかと悩むことはないだろうか。たとえば評者の場合、『源氏物語』の貴族の生活というものがいまいちわからず、学校の古典資料集などを見てもモヤっとしたものだ。祭りの観覧に牛車を止める場所争いをしたと言われても、当時の大通りってそんなに狭かったの？ みたいな感じで。

さて、本書の対象は古代中国だが、当時の人々の日常が史料をもとにして細かく再現されている。鶏の鳴く頃に起き、仕事は早朝から行う。夕方には宴会を始め、帰宅後早く眠りにつく。電気がないので明るいうちに仕事、夜は休みの時間だったのだ。このへんは現代とはかなり異なるだろう。だが似ている部分もある。外出前に入念にメイクをする女性たち。プレスケアの習慣。顔採用をする役所には驚きかもしれない。

古代中国にタイムワープしたかのような語り口も面白く引き込まれる一冊だ。

(三三四頁 税込二〇五六円 11月刊)

いつもの言葉を哲学する

古田徹也著
朝日新書

スピード感、まん延、社会人……。日常に溢れたこれらの言葉。なぜ「く感」とほやかすのか？ 「蔓延」ではなく「まん延」と表記すべきか？ 「社会に出る」ってどこの社会？ 現代社会では、相手の言葉へ「当意即妙」に応答できることが称えられる。そのせいで、自分が使う言葉を吟味し、責任をもって用いる姿勢は蔑ろにされがちだ。軽薄な紋切型の謝罪会見がそのなれの果てだと著者は言う。

言葉とは、常に変容する「生ける文化遺産」である。したがって言葉には、その地の文化や歴史のみならず、使用者本人の過去や思想も反映されることが繰り返し言われる。ある体験によって、「豆腐」ではなく「豆腐」という表記に著者が愛着をもち始めたように。だから、言葉について考えることは、文化も歴史も、そして自分自身も大切にすることだ。ただ問題を提起するだけが本書の目的ではない。批評とは何か、どんな手順を踏めばいいのか、一步一步教えてくれる。批評と非難は違うのだから。さあ、言葉を材料に、批評する力を身に着けよう。

(二八九頁 税込九三三円 3月刊)

都市と食事から、緩いつながりの可能性を考える

最近孤独を感じたのはどんなときだろうか。一人、しいんとした部屋で飯を食べたとき？ 街にたくさん人がいるのに、自分の友達は誰もいないと思ったとき？ 新しい生活が始まったばかりの人は、ひとりぼっちだと感じることも多いかもしれない。しかし、そのときあなたは本当に「ひとり」だったのだろうか。一人で過ごすことは「孤独」なのだろうか。今回紹介する二冊の本を読むと、これまで見えなかった、つながりのあり方に気づくかもしれない。

都市——目に見えない連帯

『ひとり空間の都市論』(ちくま新書)で南後由和は、都市には至る所に、ひとりであることが確保された「ひとり空間」が存在していると述べている。それは個室とは限らず、例えば店員とほとんど話さずに注文ができるような飲食店のなどもこれに当てはまる。都市は人口密度が高いが、お金さえ払えばひとりであることが許される。このような日本の都市風景は、家庭や地域よりも国家や会社への従属を優先する人々の態度によって生まれた側面がある。

興味深いのは、「ひとり空間」の利用者は完全に孤立しているわけではないという指摘だ。そこで人々は「静かに振る舞う、視線を合わせないなどの規範を共有し、『直接的な社交性なき小集団』を形成することでゆるやかな連帯意識を醸成している」。一人黙々と食事をするラーメン屋も、ほとんど店員と会話をせずに利用できる一人カラオケ店も、薄いカーテンで仕切られたカプセルホテルも、その場所にある暗黙のルールを守ること、同じ空間を共有している。空間には、その場所特有の、目に見えない人との距離感が存在している。人とのつながりとは、必ずしも知人とおしゃべりするよ

うなことではない。私たちは空間を移動することで、周囲の人との境界を自在に狭めたり広げたりしながら過ごしている。

食事——自由で利他的な連帯

『縁食論 孤食と共食のあいだ』(シミマ社)で藤原辰史が提案する「縁食」とは、誰かの気配を感じたり、また時には周囲の空間と対話したりしながら、食事を通して他者と利他的につながる連帯の在り方だ。その名前は、著者が小さい頃親しんだ「縁側」——外部との境界の強さが、シーンによって変化する場所——に由来する。

日本政府が注目している「共食」に著者は警鐘を鳴らす。本来、労働環境や福利厚生改善によって実現されるべき「幸福」を、家族愛によって解決させようとしていると指摘する。そう、食事風景には人との繋がりが敏感に映し出される。近代日本に広まったちゃぶ台は、前近代の家族単位にこだわらないお膳の食事とは対照的な、内に閉じていてつながりが強固な家族像を象徴している。

しかし本来、ともに住むことや人とながらうことは、もっと自由で緩やかなものであるはずだった。生活のほとんどは家の閉じた場所で行われる中、食は外に公開され、家族を越えた人との「縁」を育んできた。身分も年齢も異なる人々が気兼ねなく集える、居心地の良い場所を作る力が食事にはあると著者は述べている。

ひとりであることも、人とながらうことも、想像以上に何気なく自由なものかもしれない。孤独も連帯もその中に転がっていて、それを行き来しながら生活するなかで、居心地の良い、緩やかな人との関係性は、だんだんと形成されていく。

(汪漢)

暴力は何を築いてきたのか

ロシアのウクライナ侵攻が世間を賑わせている。原子力発電所への攻撃、核の脅威、世界大戦への警戒。平和な日常は息をひそめ、暴力がむき出しの脅威をふるっている。今回はそんな情勢の中、国家の暴力を捉えるうえで三つの本を紹介しよう。

権力と暴力、そして自由

かつてマックス・ウェーバーは国家を暴力装置と呼んだ。警察や軍隊は暴力を持ちそれが正当化されている。国家の本質を暴力に見るウェーバーに対し、アーレントは『暴力について』（みすず書房）において正当化のプロセス、集団で行為する場に働く権力に洞察を深めていく。そして権力と暴力が類似的に語られていることを批判し、暴力の対概念としての権力を明示する。

「権力のいかなる減退も暴力への公然の誘いである」。銃口は命令を生み出すことはできるが権力を生み出すことはできない。そうであるならば権力が暴力を通じて統治をおこなう時、権力の減退を示すこととなる。では暴力は権力を作り出すことはないのだろうか。

そこで紹介するのが小倉充夫著『自由のための暴力』（東京出版）だ。アフリカ研究をする著者は本書において、革命・植民地支配からの独立・民主主義においてどのように暴力が役割を果たしてきたかを分析していく。

「急激な変革は必ず抵抗を招く。暴力的改革は政治的不安定を起すため改革は常に漸進的でなくてはならぬ」。政治の場ではこんなセリフが繰り返されフランス革命がその槍玉としてあげられる。



しかし本当にそうだろうか。フランス革命は確かにロベスピエールの暴走を招いたが人権宣言や民主制の土台を築いた。ハイチの独立、マルコムXの闘争、エチオピア革命。確かに反発を招きその後の混乱もあった。しかし暴力に訴えざるを得ない状況や、その成果を私たちは知っているのだろうか。本書は、抑圧される側の暴力、そして勝ち取ってきた自由の歴史的事例が描かれる。こうした記述は暴力を一概に否定し、独立に血を流さなかった日本社会にとって自身を見つめる一冊となるはずだ。

暴力はどこにあるのか

権力の対立概念としての暴力、自由を獲得するために発揮される暴力。安定した秩序においても、暴力は常に消え去らない。では暴力はどこにあるのか。

最後に紹介したいのはダグラス・ノース他著『暴力と社会秩序』（NTT出版）だ。本書では暴力を通じて国家を二つに分ける。自然国家とアクセス開放型国家。生まれや地域に縛られ一部のエリートが支配層になる自然国家では、暴力は潜在化される。平和状態の方が戦争状態よりも利益があるなら暴力は出現しない。一方で、人々が生まれや地域から解放され社会を選べるアクセス開放型国家では、暴力は制度化される。誰の利益にかかわらず暴力は制限されていく。ノースは現代を分析しても、その多くが自然国家の暴力システムに留まっていることを指摘する。そしてどのようにしてアクセス開放型国家に移行するか、その条件を記述していく。

日常の裏に暴力は潜んでいる。こうした世情の中で改めて暴力とは何か考えてみては。そのための手がかりに是非。

(きもの)

編集後記

ずっと、言葉を探して生きてきた。この一瞬の感情を切り取る言葉、自分を支える言葉、大切な人へ思いを伝える言葉——。ずっと、言葉を探して生きてきた。そんな人生だった。

大学院に入ってから、数えきれない出会いがあった。人、物、場所。そして本。そんな中でも、私は一人ひとりとの出会いに感謝したい。新しいスタートの朝、議論を戦わせた昼、酒を交えた夜。思えばいつも私には言葉があった。今こそ言おう。ありがとう。

明け方のまだ寒い時間、鴨川を走る。白い息を吐く。朝日が差す。今日が産声を上げる。——さあ、新しい物語を始めよう。(出席点)

私は3年間、自他の体験世界を自他が共に理解できるように表現を目指し、ある人間たちを映像や言葉で描き続けた。体験そのものをありのまま表象することはできない。そんな当たり前のことを吹き続けながら、作品は完成した。作品は作家の世界のほんの一部を切り出し、差し出してくれるだけだと痛感する。『綴葉』編集委員は作品を読み、書評を書く。長くて1200字程度の書評の中には、本の紹介だけでなく、批評まで含まれている。「なんと軽率で暴力的な営みか!」。自分の3年間分の書評を私が責める。責める私、責められる自分、どうかそのまま。(石透)

当てよう! 図書カード

新入生の皆さん知っていますか。「京都市キャンパス文化パートナーズ制度」を使うと、京都の文化施設で優待を受けられるんです。ではここで問題、この制度を使って100円で入場できる施設は次のうちどれでしょうか?

1. 京都府立植物園
2. 大西清右衛門美術館
3. 岩倉具視幽棲旧宅
4. お辨當箱博物館

(きもの)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは5月15日です。



《12月号の解答》 12月号の問題の正解は、3. のパークリーでした。同号の企画で取り上げられた大森荘蔵と同じく、理系文系の区分に囚われない破格の哲学者だったようです。

図書カードの当選者は、しおんさん、みつさん、ねこねこ555さん、はかいさん、とのさんさんの5名です。皆さんご当選おめでとうございます! (とよ)

読者がらひひひ

○書評はもちろん、巻末のクイズも楽しみにしています。雑学を一つ知るきっかけになって面白いです! (法科大学院 大三屯)

——最終ページまで楽しんで下さり嬉しい限りです。各号のクイズ担当者が狙うのは「ネット調べればギリギリ分かる事柄」です。これからもちょっととした新しい知識を届けられれば……! よろしくお願ひします。

○齋藤飛鳥しが勝たん

(工学研究科・窮鼠猫を噛む)

——どうもありがとうございます。一二月号では特集「こういう本もありだよね」にて、浜辺美波の写真集を取り上げました。男女問わずアイドル本を書評するのも面白そうです。○オミクロン株と寒波を警戒してお正月は帰省しなかったのて読書三昧の冬休みでした。自分の好きな本を読むのは楽しいのですが、まとまった休みには普段読まないジャンルに挑戦できるので参考になっています。今後も多様なご紹介を期待しています。

(防災研・シャコサボテン)

——不自由な情勢を活かす方からのお便りです。ご愛顧ありがとうございます。春になったらからの『綴葉』にもぜひご期待! (とよ)